

ヨーロップの古い街並みを描いた瀬上さんの点描画

## 渾身のペン点描画

上小谷地区に暮らし、ペン点描画を描く瀬上誠治郎さん(74)を訪ねました。点描画は、多くの点の集合や短いタッチで表現していく画法の一つ。瀬上さんの画材は独特で、カレンダールの裏側の白紙面に水性の黒ペンを使って描きます。

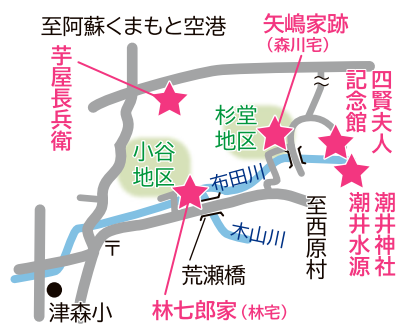
点の形や濃淡を使い分けながら、ヨーロッパの街の風景や動物など、これまで300点ほどの作品を完成。瀬上さんは参考とする絵本や写真を見ながら、下書きは一切なしで描いていきます。「紙はいろいろ試しましたが、カレンダールの裏紙が一番ペンを走らせやすいことが分かったんです。1枚を完成させるには2〜3週間かかりますが、描き始めたら食事も忘れず」と瀬上さんは笑います。



八代市坂本町から移住し、下小谷地区で第2の人生を謳歌する瀬上さん夫婦



水性の黒ペンで描く点描画。細かい作業ばかりが続きます



瀬上さんと妻の都代子さん(75)は9年前、八代市坂本町から移住しました。「越したばかりの頃、『縁もゆかりもないところへどうして?』とよく聞かれ『これから縁もゆかりもつくっていきまます』と笑って答えました。地域の皆さんはどなたもいい方ばかり。ここでの暮らしが気に入っています」と都代子さんは話します。

瀬上さんは、先の「お法使祭」で世話役の一人として祭りに参加しました。すっかりと小谷地区の住人になった2人の第2の人生は、心から充実しているようです。

## ちっちゃながまだしもん

昔から益城町で盛んに作られてきたのが、冬スイカ。冬の風物詩の一つです。

この時季、下小谷地区の渡邊貴文さん(33)と瞳さん(30)夫婦も、おいしい冬スイカを出荷しています。そして渡邊家には、心強い助っ人がいます。出荷作業が進むハウス畑で汗を流していたのが、長男の然君(7)と次男の京君(4)兄弟です。二人が担っているのは、スイカの下に敷かれたマットの回収です。

「昨日も畑に来て、524枚集めたよ」と胸を張る然君。ハウスの中で収穫する両親の後を追いかけて、敷きマットをせっせと回収する作業ぶりも手慣れたもの。小さな長靴についた泥が、その頑張りの証です。

「伸び伸びと育ててほしいですね」と目を細める貴文さんと瞳さん。仲の良い両親に見守られながら、ちっちゃながまだしもんたちは、畑の中を元気いっぱい走り回っていました。

## 散歩の終わりに

激動の時代を生き抜いた郷土・矢嶋家の人々の生き方に触れた今回の散歩。布田川の流れは当時のままで、タイムスリップしたような感覚を覚えました。「四賢婦人記念館」には、後世に残すべき大切な物語が伝えられています。ぜひ、訪れてみてください。今日の出会いに感謝。



おいしい冬スイカが次から次と収穫されます



左から渡邊瞳さんと京君、然君。みーんな最高の笑顔!!